

コメント

堀江 俊一

(園田学園女子短期大学)

コメンテーターということなのですが、発表者の皆様のお話を聞きながら考えたことを申しあげて、コメントに代えさせていただきます。

何を考えていたかと申しますと、子どもの世界というのは平等なんだろうか、すべて等しいのであろうかと、あたかも国連ユニセフの沢さんにたてつくようなことを考えておりました。といいますのは私は文化人類学をやっておりますので、取り扱う社会が、普通の言葉で前近代といいますが、近代化されていない社会なわけです。そういう社会では子どもというのは、どうも平等ではないように見えるのです。だからこそ国連の「子どもの権利条約」が出来るということになるんだと思えますが。

例えば私の研究しております台湾の漢族、いわゆる「中国人」ないし「台湾人」と考えていただいて結構なんです、彼らの社会での子どもの育て方というのは、いうまでもなく男の子と女の子とで非常に大きく違ってきます。男の子の場合、社会に出ていかれるようにということで、“socialization”(社会化)という言葉がピッタリ来るような躰方をするのです。これに対して女の子

というのは、結局家に入るということを前提に、家事の手伝いなどをさせて家事訓練する。であるからこれは“socialization”ではなく“domestication”（家庭内化）ではないかと考えて、ある機会に口走りしましたところ、本日司会されています田中さんに「言い過ぎである」と一蹴されたことがあるんです。その時は「駄目か」といった感じで終ったのですが、内心少しは悔しかったので、それで後で考えてみましたら「家庭内化」の見事な事例が見つかりました。

台湾の漢族社会には、一般に童養子と言いますが現地の言葉で言いますとシンプアとかセイセイナムロイという、童女を養子にする慣行があるんです。これは将来、実の息子の妻にすることを前提に、生れて直ぐから二、三歳、五、六歳の女の子を養女にするというものです。今はありませんけれども、二〇〇〇三〇年前にはかなりのパーセンテージで、決して珍しいことではありませんでした。こうして引き取られたシンプアに対しては、その家の実の娘たち以上に家庭内の躰が厳しく行なわれる。ですからシンプアに限り、まさしく台湾漢族の女の子はシンプアに限り、“Jonestification”されるのであって、決して“socialization”されるのではないかと考えて良いのではないことになります。

そうしますと女の子だけとりましても、台湾漢族の場合は生れたあとの養子縁組、養取などによって、「子どもの世界」として一括できない「二種類の子どもの世界」ができてくるかといえると思います。これで日本の社会の方を見えますと、日本でも

農村を主とするような民俗社会、“folk society”、といいますが、今はないも同然ですがそういった社会に、一部似たようなことを見付けることができます。例えば男の子の場合です。跡取りの息子とそれ以外の男の子、一番分り易い例で言いますと長男と次三男ですが、彼らの育つ社会というのはその出生順位によって少し違うのではないだろうか。違うと見た方が良いのではないかという風に思います。例えば若者組、若衆組、いろんな言い方がありますが、一二、三歳から結婚前くらいの若者の組織が農村部あちらこちらにあったのですが、その若衆組に入る人達というのは将来家の跡を継ぐことが約束された、跡取り息子だけだったのではないかと思われのです。これは実際神奈川県で調査したときのことですが、話をきいてもメンバーの構成などについてなんか話が分からない。見えてこないんです。どうしてかというところ、話を聞く相手の人は結局、農家の今の当主の方ですから跡取りさんだったわけです。他の、例えば次三男は、小学校ないし高等小学校出た段階で奉公にどんどん出ていってしまうわけです。そうすると小学校上がる位までの子ども組時代でしたら彼らの世界も均質であるかもしれないが、その先では幾つかに別れてしまうわけです。小学校の間でも例えば貧しい家でしたら、次三男だけでなく長男もそうなんです。二年三年で学校を下がってしまい、行かなくなってしまう、子守奉公などに出ることもありまして、そうすると、日本でもかつては子どもの世界というのは幾種類があったのではないかと考えられるんです。

ただここでひとつお断わりしておかなければいけないのは、これは先程中江さんがおっしゃったことを間違っているという訳ではないということ。というのは、日本文化と違って一応総称される文化があるわけですが、これは決して全体が均質な単一文化とか、「単一民族」であることを意味しないと私は考えております。特に民俗慣行のレベルで話をいたしますと、大きく見て東日本と西日本の間に非常に明確な違いがあることは御存じのとおりですが、更に細かく見ていけば、きりがなくいろいろの多様性が各地で見られます。ですから中江さんとの見方の違いは、そういうことが関係していると思います。ですからここでは東日本に限ってということにしたいんですが、ことに東日本ではどうも子どもの世界、男の子の世界は一つではなかったという気がいたします。

それではいつそれが一つになったかと考えますと、言うまでもなく近代が始まったときですから、日本では明治ですね。日本では明治三〇年代あたりからだと思えます。この頃から都市を中心に教育が普及するとともに高等教育が出てきてどうのこうのという話になりますが、中江さんのおっしゃった言葉で言えば「世襲でなくなった」ということが大きく影響していると思えます。世襲ではなく何になったかといえますと、今度は「学歴」になったわけです。つまり出生順位によって跡取りであるとかないとかいうことよりも、この子が出来る子か出来ない子かということの方が問題になってくるわけです。ここで初めて子どもの世界は、ある意味で、均質化したといえるわけです。しかしはっきりいって

しまいますと、それとともに現在の受験戦争、受験地獄にそのまま繋る道に踏み込んだのだと考えております。ですから、敢えて日本だけに限って申しますが、子どもの世界が均一になってきたのは良いことである反面、別な意味で子ども達にとって暮しにくい、初めは男の子にとって、そして女の子もそのうち入ってくるのですが、暮しにくい世界になっていったのではないか、などということを皆様の発表をうかがいながら考えておりました。